五個荘コミセン歴史公開講座　第67回 コミセン歴史公開講座　回覧

あて字の歴史

お相撲さんのチョンマゲを「大銀杏(オオイチョウ)」と呼びます。

秋に色づくイチョウは広辞苑で、「鴨脚樹・銀杏・公孫樹」と記載されています。

「鴨脚」は，イチョウの葉の形が似ていることから中国では「ヤーチャオ」と呼び、中国原産の「イチョウ」が日本に入ってきてから、「ヤーチャオ」が転訛したものと思われます。

銀杏は、イチョウの果実で、唐音で「ギンアン」と呼び、日本では「銀杏」の字が使われています。

日本では「銀杏」を「イチョウ」とも読みます。つまり、「銀杏」はあて字なのです。

中国では、イチョウの種子は「白果」と呼びます。

日時　令和7年7月20日(日曜日) 午後1時 ～ 午後3時頃まで
場所　五個荘コミュニティセンター 二階 大会議室(TEL 0748-48-2737)

☆ 筆記用具はご持参ください。

竜田を語る会　連絡先 高野 勝次　TEL 0748-48-6628

大和言葉

日本に文字の無かった時代より、言葉の文化は発達していました。縄文時代後半期より弥生時代を通じて使用されていた言葉を「大和言葉」といいます。遣隋使・遣唐使をはじめ、中国との文化の交流が盛んになって、漢文を読み書きしが日本にも伝わり、漢字という文字が使用されます。

漢字は、日本最初の文字として、仏教の経典などを通じて深く理解され使用されてきました。

当初は、漢字の「唐音」の読み方を借りて，和歌や大和言葉を「借字」という手法で広く使われ、「万葉集」などに記載されています。

「和漢三才図会」には、「月」を「豆岐」・望月を「毛知豆岐」のように借字の実例を教えてくれています。

この借字の名残りがあて字として残っています。

宇田川溶暗の作語による「珈琲」は「コーヒー」で、夏目漱石の作語による「我楽多」・「愚図」・「浪漫」などのあて字は、今でも日常的に使用している「あて字」なのです。